

【論文】

文学館にみる「地方」

“Locality” seen in Literary Museums

天雲成津子

TENKUMO, Setsuko

キーワード：日本近代文学館；文学資料；秋田；種蒔く人；文化戦略；MLA 連携

Received: 2013. 12. 15 Accepted: 2014. 1. 19

1. はじめに

昭和 30 年代は高度経済成長を成し遂げた日本が、大衆消費社会へ変貌していく時代である。その一方、戦前からの日本にあった民俗や文化の再評価と、伝統的なものが失われていくことへの自覚と危惧をもった時代であった。将来の世代へ伝承していくべき価値のある文化的な諸創造物、文化財を保護する思想が世界的にみても早い段階で普及していた。

文学の伝統が日本の誇りとなるとその意義が主張され、文学資料の散逸を防ぐために、近代文学館設立計画が進展したのもこの年代以降である。文学館研究の先行研究としては、岡野裕行「日本近代文学研究における文学館の役割―「全国文学館協議会」加盟文学館の発行物を中心に」（2006）がある。彼は日本近代文学館をはじめとする全国の近代文学館の活動を調べているが、博物館より専門図書館が近いと位置づけしている。山岸郁子は「〈資源〉としての文学」（2012）で、現在の文学館の厳しい運営状況と、地方の文学館運動を支えた背景には地方がその地の「文化資源」をもつことへの要求があったと分析している。

本稿では、近代文学資料を保存すべく日本近代文学館が誕生し、地方の近代文学資料保存の動きに及んだ社会の要因にも目を向ける。文学館の活動から垣間見える地方の文化戦略をとりあげ、地方の文学館には、文学だけでなく地方文化の発信要請があったことを北海道文学館の例からみえる。さらに日本近代文学館に関わり深い研究者らによる雑誌『種蒔く人』の再評価が、秋田県での種蒔く人顕彰活動に繋がっていったこと、資料情報のもつ意味の具体例を秋田市立土崎図書館「種蒔く人資料室」の資料例から説明する。加えて文学を地元結びつけて活用している事例として、花巻市の宮沢賢治記念館を述べる。

近代文学館設立時の趣旨にあった資料保存に直結しにくい現状への問題も含め、地方の文学資料保存と活用の課題と今後について考察する。

2. 近代文学資料の保存運動—中央と地方

2.1. 文学資料の保存運動—日本近代文学館の誕生

近代文学資料の散逸の危険性を憂いた高見順(1907-1965)、小田切進(1924-1992)らを中心に、川端康成(1899-1972)を始め多くの有志の文学者・研究者たちが、文学資料を収集・保存する施設の必要を社会に広く訴えた活動が実り、日本近代文学館がオープンしたのは、昭和 42(1967)年である。日本近代文学および現代文学の関係諸資料を蒐集・保存し、一般の利用に供することにより日本文学の振興・研究に資し、国民文化の向上と発展に寄与する目的で開設された。

日本の固有性を示す資源としての文学を保存する重要性が叫ばれ、古典文学や海外文学を含む文学全集の刊行が盛んになり、一般家庭にも文学全集が置かれていくようになる。文学はより日常的で身近なものとなり、文学の大衆化に結びついていったのである。

昭和 22(1947)年制定の学校教育法に拠り、新制大学が各地に設置され、それら地方の近代文学専攻の講座が確保され研究人口は増大、文学研究の黄金時代といえる時代であった。昭和 26(1951)年に日本近代文学学会が設立、日本の近代文学が研究対象として認められ、研究方法も文献学的な文学研究が全国に広がり、資料研究の意義が認知される背景となっていた。

この近代文学館設立運動の始まりには、プロレタリア文学研究者達が大きく関与していた。昭和 28(1953)年の春、日本近現代文学の歴史を原資料に基づいて吟味し直すことを目的に小田切秀雄(1916-2000)を中心とした近代文学研究所が結成される。研究所の事業のひとつとして、昭和 35(1960)年 12 月以降に、容易にその揃いを見ることができなかった雑誌の復刻事業を始める¹⁾。その過程で、戦前の弾圧などで資料の散逸や消滅がひどい現状を憂慮し、「プロレタリア文学図書館」構想が浮かび上がった²⁾。

さらに昭和 36(1961)年、立教大学祭で小田切進研究室が開催した「大正昭和主要文芸雑誌展一二〇五誌」で多くの雑誌が展示された折、雑誌の散逸や消滅はプロレタリア文学だけではなく、モダニズム派など他の文学雑誌についても同様に深刻なことが明らかになり、「近代文学図書館」の建設が急務とされたのである。昭和 37(1962)年 1 月 31 日に小田切進から高見順³⁾に打診し、2 月 13 日に正式に申し入れを行っている⁴⁾。

昭和 37(1962)年 5 月 2 日に設立の準備会、昭和 38(1963)年 4 月 7 日に財団法人日本近代文学館が発足し、昭和 42(1967)年 4 月 13 日に開館している。この間「文学百年の流れ—近代文学史展」(伊勢丹新宿店)が開催され、期間中延べ 4 万 2 千人の入場者数を記録している。この展覧会で日本の文化にある歴史的な意味が見出されていった。原資料を保存する必要性が社会的に広く理解され、昭和 39(1964)年には、運動の意義が認められ、開館前にもかかわらず日本近代文学館は菊池寛賞を受賞し、マスコミにも大きく取り上げられた。

民間の財団として設立、運営され、現在は公益財団法人となった日本近代文学館であるが、その事業に全国文学館協議会という各地の文学館の運営協力活動が含まれている。

2.2. 地方における文学資料保存の動き－北海道立文学館－

文学資料の保存と活用のための施設として日本近代文学館が設立されたことは、地方にも波及し、館設立の機運が盛り上がっていく。文学の底辺を形づくる文芸同人雑誌など、地方文学や文化にとって大切な資料が散逸していく状況への危惧感は、全国各地に共通のものであった。数十年の活動を持続している北海道文学館を例に述べる。

北海道文学館の沿革によると、昭和 41(1966)年、「北海道文学展」(札幌・丸井今井本店)の開催が設立活動の始まりという。この札幌市内のデパートで開催された展示会のテープ・カットは北海道文学館初代館長となった更科源蔵(1904-1985)と高見順の後任として日本近代文学館理事長となった伊藤整(1905-1969)であった。北海道文化団体協議会、北海道公共図書館協会、北海道新聞社共催で、10月25日から30日までの6日間で2万人が訪れる大盛況の成果が後の財団法人北海道文学館設立へ繋がる。展示されたものは北海道に関連する作家の写真に始まり直筆の原稿や書簡、作家の愛蔵品などである。「開道100年を契機に、北海道の文学遺産を集め、その精神史を一堂に繰り広げて、あすの北海道文学発展の礎にしよう」という多くの在道文学者、文学研究者によって開催された⁵⁾。この展示会の企画コンセプトが、北海道文学館の活動に反映している。昭和 42(1967)年4月の北海道文学館の設立趣意冒頭⁶⁾には次の一文がある。

文学の面では、見事に完成をみた「日本近代文学館」はさておき、近代の文豪を記念する個人記念館などもそれぞれの郷土に設けられ、郷土が日本の近代文化に果たした業績について、次の世代の自覚を高めています。

こうして北海道文学館は、その設立の趣意に「北海道関係の諸文学資料や関係諸物件を広く収集・保存し、研究と展示・閲覧に積極的な役割を果たす」と同時に、「各種の文学行事を催して文字どおり北海道の文学センター」にするとし、「地域全体の文学的成果を一堂に集め、これを後世に伝える」企てが、「北海道、ひいては日本近代文化の研究と発展に大きく寄与する」と明記した⁷⁾。近代文学で北海道文化を表現することを謳っていたのである。

日本近代文学館設立運動の流れを踏襲し、加えて北海道という地域を伝える活動が主な存在意義としてあったことがわかる。

昭和 46(1971)年に旧札幌高等裁判所庁舎を札幌市資料館として開館以来、建物の一角を北方文学資料室として北海道文学館が展示企画を担当し、事務所も後に同建物内に移り、借用し続けていた。北海道の文化を伝える施設には、長く北海道文学館からなる展示が行われていた。

任意団体であった北海道文学館は、昭和 63(1988)年10月に財団法人北海道文学館となる。その趣意には、保管のための空調設備等を完備した独立施設が長く課題として存在していたことが記され、北海道立文学館を望む声があったことを伝えている。念願の北海道立文学館は、平成 7(1995)年⁸⁾に、北海道教育委員会の管轄下で開館し、財団法人北海道文学館に管理委託して運営された。4年契約の指定管理委託となるのは平成 17(2005)年からで、

平成 23(2011)年 4 月 1 日に財団法人は公益財団法人北海道文学館に認定された。このように北海道立文学館は実績を積み重ねながら、施設と体制整備に紆余曲折を経てきている。

北海道に限らず地方の文学館設置の要望は、資金力や継続性、信頼度などの問題から自治体に向けられることが多い。自ずからその活動は土地の文化を明らかにすること、地域への貢献が問われ、地域の文化、風土を表わす役割を期待されることに繋がっていく。地方自治体の文学館の存在意義には、文学をはじめとする地域の文化を表象する機能、住民への社会教育、さらに外部へむけての観光や文化イメージへの貢献も含まれている。

これは、東京一極集中が進む中で、地方の存在意義、独自性が問われていたことと無縁ではない。郷土ゆかりの「文学」や「文学者」が発見され、関係資料を管理・展示しようとする文学館設立という動きが各地で出てきた。その意図は「文学者」の足跡を歴史的に辿り、「文学」作品をその中に位置づけ、顕彰するといったものであった。文学館の展示における「資料」の選択とその配列には、「文学者」の身体性とその土地の風土性が反映されていた。その地の風土が作家の内面を作り出したことを主張していた。和辻哲郎が「風土の現象を文筆、美術、宗教、風習等あらゆる人間生活の表現のうちに見いだすことができる⁹⁾」としているが、徳田秋声・室生犀星の金沢、石川啄木・宮沢賢治の岩手、太宰治の津軽と、土地の風土と作家の意識が結びついたといえる事例¹⁰⁾は数多い。

地方では、自治体そのものも市町村合併で組織の見直しを求められ、自治体基盤の根拠を住民に問われている。土地にある独自の文化を伝える施設をどう見直すか、その施設が伝える文化をよく知る以前に、予算カットや人員削減が続いている状況も耳にする。地方の文化発信には、地域全体のマンパワー、民間の熱意が不可欠であり、自治体単独で取り組むことは、魅力に乏しい施設となってしまう可能性が高いのである。

3. 雑誌『種蒔く人』と日本近代文学館との関わり

3.1. 雑誌『種蒔く人』

日本文学史において近代文学から現代文学へ進む分水嶺とも位置づけられ、プロレタリア文学運動の揺籠とされる雑誌『種蒔く人』は、日本海側の地方都市である秋田県南秋田郡土崎港町（現：秋田市土崎）から発刊されている。大正 10(1921)年 2 月 25 日、土崎小学校の同級生出身の 3 人、小牧近江(1894-1978)、金子洋文(1893-1985)、今野賢三(1894-1969)が主要同人となって創刊に関わった。

『種蒔く人』土崎版は 3 号刊行した後に休刊、10 月に『種蒔く人』東京版として刊行となるが、その東京版表紙にある誌名の下には「批判と行動」と付されている。土崎版当初の同人たち数名は秋田に残り¹¹⁾、文字通り秋田で社会の現状を批判し、労働者のための運動を実践していく。彼らの活動は多くの青年たちが社会に目を向けることに繋がり、秋田の社会思想や政治運動へ参加する、労働運動家たちを育むこととなる。今野賢三は、秋田の労働運動にも参加し秋田刑務所に収監され、その後長く秋田で社会運動に関わる執筆活動をしていた。金子洋文は、土崎や秋田を頻繁に訪れており、政治活動に関わることもあつ

たが、東京で活動する秋田県出身の文化人たちとの交流に熱心であった。小牧近江も親戚や同人たちとの交流があり、彼ら3人と秋田の繋がりには、終生続いていた。

彼らが遺した資料は、『種蒔く人』に縁の深い秋田の図書館、秋田県立図書館内の種蒔く人文庫と県立図書館分館のあきた文学資料館に、出身地である土崎港町にある土崎図書館の種蒔く人資料室にと、それぞれ委ねられている。

大正期から昭和にかけての日本は思想統制が厳しく、「社会」という言葉を口にするだけでも危険分子、思想関係の本を持つだけで弾圧の対象とされる状況があった。『種蒔く人』を持っていることは、危険分子の証として官憲に扱われることを覚悟する必要があったのである。加えて戦時中に土崎港町は秋田県で唯一の大規模な空襲¹²⁾を受けた地であり、多くの資料は残っていないとされていた。

このような時代背景から、『種蒔く人』という雑誌本体を見ることは困難で、まして発行部数200部とも300部ともされる土崎版を保管している人がいることは考えられなかった。そのため、雑誌の存在は記憶の中で語られ、研究者の間ではいわば伝説と化し、その具体的な全貌をとらえることは不可能とされていた。『種蒔く人』研究は、生き残った関係者たちの証言、回想記録に頼るしかなかった時期が長かった。事実として語られることが、事実として受け入れられるとはかぎらない。プロレタリア文学雑誌といえば共産党系である全日本無産者芸術連盟（略称、NAPF：ナップ）の機関誌、『戦旗』のみが大きく取り上げられた時代があった。当時者が語られないことも多く、その検証が及ばないこともあった¹³⁾。小田切秀雄による「ナップの眼鏡を外せ」¹⁴⁾という文学史観見直しの提唱は、日本近代文学研究に新しい視点をもたらすことになった。

小田切秀雄らは、戦争をはさんだ数十年で、時代の思想を伝える戦前の文学資料の保存について危機感をもっていた。プロレタリア文学雑誌だけでなく、戦前の資料の多くが同様な状況にあったことから、文学者たちと協力して日本近代文学館設立を働きかけることとなった。その過程で小田切秀雄は研究成果を活用した雑誌の復刻出版を行っている。数少ない現存資料を集め、その雑誌についての解説を加え、復刻として刊行するという日本近代文学館の活動は、復刻雑誌が一次資料にそって忠実に再現した。研究者にとって新しい裾野をもたらしただけでなく、多くの文学愛好者たちにとって、文学が身近なものとして目にする機会をもたらしたのである。『種蒔く人』の復刻は当初、近代文学研究所が刊行し、日本近代文学館が引き継いでいる。後に、この雑誌復刻という出版活動は、多くの民間業者による復刻の刊行に繋がっていった。

3.2. 『種蒔く人』復刻—秋田の文学資料保存

秋田では、個々の文学顕彰活動は存在していたが、地方文学という全体に目を向けた独立施設としては、秋田県立図書館の分館としてあきた文学資料館が開館する、平成18(2006)年まで待たなければならなかった。県内大学には文学部がなく、文学館という機能が必要とされる資料保存、管理のための専門的な体制、研究活動には難しい条件であった。文学専門の図書館として収集と保存と活用を行うという意味では北海道より遅く、条件も未整備であった秋田県であるが、『種蒔く人』への熱心な地元支援組織が昭和37(1962)年9月と、

早くから活動していたのは、雑誌復刻の影響があった。小田切秀雄らの日本近代文学研究所は、その研究の中から昭和 36(1961)年 7 月に復刻版を刊行し、それまで幻とされ存在のみ知られていた雑誌『種蒔く人』の全貌を、多くの人が目にすることが可能になったのである。

日本の近代文学に果たした『種蒔く人』の役割の重要性を稲垣達郎、小田切進、分銅惇作ら多くの文学研究家たちが述べている。小田切秀雄によると「昭和文学の成立をたどってゆこうとすればどうしてもここからはじめるほかない」と文学史上における雑誌『種蒔く人』を位置づけている¹⁵⁾。『種蒔く人』がプロレタリア文学を確立したとするか、近代文学の誕生とするか、社会思想に影響を及ぼしたと捉えるか、文学史の時代区分の位置づけをめぐって、山田清三郎、分銅惇作ら多くの研究家たちによる諸説がある。いずれにしても『種蒔く人』という雑誌が、大正期の文学活動、社会思想に大きな影響を及ぼしたとする評価では一致したものとなっている。

昭和 35(1960)年 7 月法政大学において『種蒔く人』創刊 40 周年記念講演会が行われ、多くの同人たちが参加し、『種蒔く人』の頃を語っている。小田切秀雄が代表する近代文学研究所¹⁶⁾が土崎版も含む全巻の復刻版を刊行したのは、昭和 36(1961)年 7 月のことである。金子洋文の残した書簡によれば、小田切秀雄はまず小牧近江にコンタクトを取っており、昭和 36(1961)年 1 月に小牧から金子宛にそのことを伝える書簡が届けられている。金子は出身地秋田の関係者たちへ呼びかけ、今野が秋田での搜索を取りまとめたものを小田切進に届けている。土崎版創刊号は、同人達も持っていなかったが、小牧の親戚で土崎在住の近江谷清六氏が所持していたものを届けるという手紙が今野から金子に届けられている¹⁷⁾。関東大震災の際、土崎と同人たちとの見事な連絡プレーが、震災時の貴重な証言となった『種蒔く人』号外発行を果たしたように、時を経て資料保存活動の折にも発揮されていたことは、着目すべきであろう。このような努力が実り、幻とされていた雑誌『種蒔く人』の原本を揃えることに成功、昭和 36(1961)年 5 月復刻版発行となる。雑誌『種蒔く人』復刻の成功とノウハウが後の近代文学館の復刻事業に継承されていったことを考えると、この雑誌が果たした役割に、戦後の文学資料保存のきっかけをもたらし、覆刻発行の新ジャンルを拓いたとつけ加えることができよう。

このような活動がきっかけとなり、秋田での『種蒔く人』顕彰の活動が盛んになっていく。昭和 37(1962)年 9 月に顕彰会が結成され、10 月には秋田で創刊 41 周年記念祭が開催、翌年 7 月から顕彰碑建立運動を開始するという動きの早さである。昭和 40(1965)年には、土崎図書館の前¹⁸⁾に土崎版の表紙であるミレーの絵を浮き彫らせた『種蒔く人』顕彰碑が建立される。同年 5 月 5 日の除幕式には今野賢三、金子洋文、小牧近江をはじめ関係者が列席した。以来、「種蒔く人」顕彰会は、昭和 46(1971)年に土崎図書館で創刊 50 周年記念展と記念講演会を開催、昭和 49(1974)年には金子洋文傘寿祝賀会、昭和 56(1981)年の 60 周年記念祭と金子洋文米寿を祝う会、翌年に洋文卒寿を祝う会と、記念事業を開催している。

3.3. 顕彰活動と研究 ―種蒔く人資料の場合―

『種蒔く人』同人で土崎小学校出身の 3 人、小牧近江、金子洋文、今野賢三のうち、昭

和44(1969)年に今野賢三が亡くなる。そして昭和53(1978)年には小牧近江が、昭和60(1985)年に金子洋文がこの世を去る。その後も有志からなる、「種蒔く人」顕彰会の活動は継続的に行われたが、彼らと同様、顕彰会からも亡くなるメンバーが続く。直接『種蒔く人』同人たちが活躍していた時代は勿論、彼らを直に知る者も少なくなっている中で、平成23(2011)年10月に創刊90周年記念集会が開催されている¹⁹⁾。長く活動をつづけてきた種蒔く人顕彰会の活動は、記憶から記録による顕彰、研究活動へと移り、今後を検討すべき時期となっている。

秋田県立図書館には、「種蒔く人」顕彰会が収集したプロレタリア文学関係の資料²⁰⁾が「種蒔く人文庫」として所蔵され、平成4(1992)年に『種蒔く人文庫目録』が刊行されている。寄贈された資料の活用例として、今野賢三著・佐々木久春編『花塵録―「種蒔く人」今野賢三青春日記』(無明舎出版、1982)がある。土崎時代からの同人で小説家の今野賢三の日記を翻刻した労作である。最近の例では、平成23(2011)年10月から11月にかけて神奈川近代文学館で開催された「没後60年記念展 いま輝く林芙美子」では、林芙美子の児童文学作品の原稿が展示された。これは秋田県立図書館所蔵の未発表原稿であった。「種蒔く人」顕彰会が秋田県立図書館に寄贈した資料の中にあったもので経過は不明であるが、貴重な資料が寄贈されていたことを伝えている。

平成3(1991)年4月に秋田市立土崎図書館が移転改築する際に、館内に開設された「種蒔く人」資料室には、顕彰会が所蔵していた資料―顕彰活動の記録と今野賢三が遺した資料が寄贈され、平成13(2001)年に『「種蒔く人」資料室」目録』が刊行されている。

小牧近江が遺した資料は、彼の遺族によってあきた文学資料館に託され整理作業が進捗している。さらに、金子洋文が所蔵していた膨大な資料は彼の遺族によって、平成11(1999)年から数年の年月をかけ土崎図書館に寄贈された。プロレタリア文学運動の生き証人ともいえる『種蒔く人』同人たちとその資料の保存については割合早い段階から意識されていたが、金子はその中心的存在であった。後に『文芸戦線』復刻を刊行する折も金子の資料が使用されていた²¹⁾。

金子洋文亡き後の資料の移行と整理には、その量の膨大さもあり、数年の作業を要し、遺族からの献身的な協力がなければ実現は不可能であった²²⁾。これらの作業を経て、秋田市立土崎図書館から『金子洋文資料目録』が刊行されたのは平成19(2007)年のことである。

90歳で亡くなった金子洋文の資料は、その存命時から多くの文学研究者達が知るところであった。明治から昭和にかけて日本の近代化が大きく進み、文化芸術の表現、情報伝達の手段が大きな変化をとげた近代日本の様子を伝えるものでもある。

現地ならではの細やかな情報が付与されることで、その資料から何がよみとれるか、全国的な著名人とはいえない人物からの資料が何を伝えるか、解説を加えることで状況が変わってくるかを、金子雄二(1896-1992)という人物からの書簡を例に紹介する。

大正6(1917)年4月30日付で、金子雄二が旅行の折に、東京で落ち合った富田碎花と連名で書き送った葉書²³⁾からは、彼等の親密さが伝わってくる文面である。

お元気で御勉強なさうで欣羨です。…雄二君を迎へて久し振りで「ミナト」の話をし

ました。…[略] …カフェポーリンにて富田さんと一所にやってきた。神田の本屋を廻って富田さんをうんと困らした。…明日帰る。

金子雄二は金子洋文の友人であり、金子洋文は彼から雑誌『白樺』を借りて読んでいた。ふたりの長年の手紙のやり取りは、作品の感想、励まし、季節のやり取りなど友人の様子を気遣うものなど、互いに誠実に対応した様子がうかがえるものがある。この書簡にある富田さんとは、イギリスの社会思想家カーペンターを日本に紹介した富田碎花(1890-1984)である。金子雄二が中心となって刊行した、短歌の地方同人誌『極光』²⁴⁾(1916-1919)にも、富田の名がある。土崎に在住の知人宅に富田が寄寓した折に、交友が生じたのであった。

厳しい経済事情から同人誌『白樺』を取り寄せて読むことはできなかった金子洋文だが、金子雄二からこの同人誌を借りて武者小路を読み、傾倒することとなる。彼から常に貸してもらえる関係がなければ、後の武者小路との遭遇や我孫子の武者小路邸への寄寓、そこで白樺派の交友を間近でみて民主主義を体感することもなかった。カーペンターの社会思想と合わせ、フランスから帰ってきた小牧の思想を受け止めることはできただろうか。金子雄二がもつ意味を加えることで、金子洋文研究だけでなく、富田碎花研究にも関与する可能性を持つ書簡なのである。

武者小路家に寄寓中の金子洋文に宛てた大正6(1917)年2月7日付の金子雄二の手紙には以下の件がある。

(略)…例の日本評論支部の問題だ。太陽堂主人²⁵⁾は一身上の都合で去る二日突然上京しなければならぬハメになった。ならふ事なら解散したく思っている。多くの支部の人は華山氏より君を慕ってたからである。…

土崎港町にあった書店で印刷所も兼ねていた太陽堂書店に集っていた文化グループがあった。そのグループを中心に金子洋文を応援する組織があったこととともに、太陽堂が雑誌『日本評論』の支部として中継していた当時の雑誌販売の方式も伝えている。後に、このグループが土崎での支援部隊となっている。『種蒔く人』震災特集号の印刷は、太陽堂が行っている。関東大震災で首都圏の印刷は壊滅的な状況であったため、地方の印刷所が駆り出されることとなり、『種蒔く人』号外を印刷することができない状況となっていた。土崎の面々の手配で太陽堂が号外を印刷し、今野賢三と金子洋文の両同人が手持ちで東京へ運んだのである。この文学史にも残る快挙の陰には、土崎の書店を中心にあった文化グループとの以前からの交友関係があった。

雑誌と異なり、「書く人」「読む人」双方を限定しているだけに、書簡には密度の高い情報の交換が行われる。筆跡や用紙など、その人の教養、その場の状況、親しさの程度など複合的な情報が載せられている。毛筆の書状がペン書きやハガキに移り、文体も変遷し、便箋の選択にも個性を伝える書簡はその内容もさることながら明治から大正、昭和までの書簡の変遷を伝えている。

金子洋文は自分用を書く際には用紙にこだわらず、原稿用紙の両面やチラシ裏紙も使用

し、鉛筆書きも多く、紙を大事にする姿勢がみられる。書き直した紙も多く保管され、草稿、下書き、雑誌新聞の切り抜きなどが多くある。政治、文化交流、演劇、児童文学と多彩な活動をした人物だけに、興味を示したジャンルは多様で、これらは多方面からの研究と活用が期待される資料である。

資料から読み取れる内容は、読み手によってその意味は変わる。土崎図書館に委ねられた資料を活かすためには、資料そのものの内容を把握したうえでの活用が求められることとなる。市立図書館の組織、司書という職種の専門性は、時代の趨勢で大きく変動しつつある現況にあるといえよう。秋田市立土崎図書館という地域の公共図書館にある「種蒔く人」資料室は、郷土資料としての保存以外に、さらなる研究と地域内外にむけての文学に限らない活用も模索する段階にある。それらは資料への理解と地域住民自らの文化資産への理解と支援が不可欠なのである。

4. 資料—記憶の伝承と活用のために

4.1. 図書館司書の専門性—アメリカ、フランスと比較して

戦後の日本近代文学館の施設設置運動、開館は地方へ波及した。そして地方の文学館設置の流れからみると、作家個人の生家など個人を顕彰して伝える機能に加え、文学が伝えるその地域の個性—文化、歴史、風土といった特性を表す機能への期待があって、文学館は成立していった。地方のアイデンティティーの発見と発信という文化戦略から、さまざまな運営法があったが、文学資料の管理は図書館に期待されることも多かった。戦後の公共図書館と司書に、その為の準備がどれ位用意できているだろうか。アメリカ、フランスの司書の仕事を比較すると、日本の問題点は明らかである。

日本の場合、図書館法第4条に「図書館に置かれた専門的職員を司書及び司書補と称する」、「図書館の専門的事務に従事する」とある。多くの大学・短大での司書課程の内容は、一般市民の貸出利用中心の公共図書館を想定したものが大半であり、専門的な資料の取り扱いを実地で学ぶ機会をもつ者は少ない。多くはその後の個人的な研鑽によっている。

アメリカの公共図書館では、専門職がやるべき仕事は基本的に3つある。コレクションをどう作るかという資料選択、それからレファレンスサービス（参考調査）があり、図書館企画のイベントプログラム（行事）を企画するもの²⁶⁾である。

フランスでは、古文書学校卒業生と中央と地方からの司書を集め、司書教育を付与したうえで国家資格を与えている。図書館上級司書のカリキュラムには、コレクション形成、文化資産としての建物管理もあり、アーカイブスを踏まえた図書館運営を行う職員養成への理解がみられる²⁷⁾。上級司書は国で養成された専門職として、研究職、国と地方の大学・公共図書館司書として各地の図書館運営の仕事に就く。地方と中央の人材交流も可能となる。地方の文化を大切にすることも、国家としての文化戦略であるという思想がある。

近来の日本の市町村規模の図書館では、司書不在の図書館さえ存在している。専門資料の扱いはもとより、施設環境について厳しい条件下にあり、資料保管に問題を抱えている

と危惧されている。一般的な書籍（＝大量の複製物）を扱う図書館業務とは異なる素養も必要となるが、日本の公共図書館の大半は、この半世紀に開館した施設であり、現場での危機感が育ちにくかったともいえる。資料保存という観点からすると、日本近代文学館開設時に指摘された文学資料の危機は、まだ解決されていないのである。

4.2. 地域における活用—花巻市を例にして

地域と文学、文化資源を結びつけた自治体の例として山岸(2012)が伝えた、岩手県花巻市の宮沢賢治記念館をとりあげる。花巻市役所が観光施設と分類しているこの施設は、その山一帯が自然公園の一画にあり、観光バスに対応できる駐車場、レストランといった観光施設もある。山のふもとには宮沢賢治童話村、花巻市博物館がある。昭和 51(1976)年に財団法人宮沢賢治記念会が創立、建設に立ち会った遺族から原稿・資料を寄贈された。昭和 57(1982)年に「今や賢治は個人のものでなく、公共性が強くなっている」と、宮沢賢治記念館条例を制定し、市が建物を管理運営し、観光・資源・史跡を目的とした公益法人である。宮沢賢治記念館では、平成 4(1992)年に「宮沢賢治学会イーハトーブセンター」という新たな研究拠点を設置、研究者による講演会を開催し、定期的に研究機関誌を刊行するなど研究拠点としての機能を果たしている。読み聞かせを行うコーナーや現地ボランティアによるガイド解説が用意されている。花巻では戦後しばらくまで、宮沢賢治の顕彰や保存活動は縁遠く無縁であったが、近来は一転したという²⁸⁾。賢治と花巻が結びついて全国的に認知された現在、人口 10 万人の花巻市民にとって宮沢賢治は郷土が生んだ偉人となっている。宮沢賢治を地域の文化資源として発信し、賢治の世界観を花巻という土地に結びつけているといえよう。

また、花巻市博物館には、チベット仏教の世界的な研究者、多田等観の貴重な資料が所蔵されている。秋田市土崎港町出身である多田等観は、資料保管の施設を用意した花巻市博物館に資料を委ねたのであった。地元小学校ではその博物館を郷土学習に活用している。所蔵するだけでなく活用も視野に入れた文化戦略が垣間見える。花巻では宮沢賢治の文学を文学資源として研究者を巻き込み全国に広め、全国からの研究者や旅客を呼び寄せている。さらに花巻生まれではなかった多田等観の資料を郷土の文化資源として育て郷土学習に活かした結果、花巻の“等観さん”として市民に親しまれている。

花巻市の場合、文化を地域に結びつけた活動の一例として記念館、博物館と学校、市全体の組織を連携し、地域にフィードバックした活動となっている。一過性の動きに終わらない自治体ビジョンのもとに行われた文化戦略、数十年の活動の成果といえよう。そこには民間だけでは為しにくい活動が多くある。

人の記憶は時の流れで変わり、人を育む要件の風土も人の移動をたやすくした近代では、その土地の記憶を伝承する行為には、新しい「もの語る」発信力が求められている。地方に存在している文学を伝え広め、枯らさぬように外に発信する活動を育むことが必要である。文化とは人が伝え育てるものであることを示している。

5. おわりに

文学資料の重要性を説き、資料保存を目指す日本近代文学館という民間施設の設立は、地方にも影響が及んだ。地方では公的施設としての文学館を望んだ結果、地元の文化を表現することが大きな目的となっていることを、北海道立文学館を例に述べた。日本近代文学館とプロレタリア文学研究者との関わり、その活動から『種蒔く人』再評価が行われ、秋田では「種蒔く人」顕彰会による動きが起きていたが、地方の公共図書館の資料室では、原資料を活かしきれない現状がある。現在の日本の司書の職能には、原資料を取り扱うことを想定していない。制度的な問題もある。北海道、秋田、花巻という地方都市を例に、文学資料に関わる活動についてこの数十年の動きを検証したことによって、自治体の文化戦略の差違がみられることに繋がった。

現在、文部科学省は文化的情報資源を収集・蓄積・提供する 公共機関であるという共通点を持ち、情報資源のアーカイブ化等の課題を共有している文化施設の連携（MLA）を模索している。このミュージアム（Museum）・図書館（Library）・文書館（Archives）の連携を推進するという中には、文学館も含まれている。各館に共通して必要とされるのは、資料の収集・管理ができる専門的職員の存在と、研究者や一般の利用希望者が外からアクセスできる環境の保証である。

地方の文学館活動にはその地の文化資源を把握し、それらを適切に保存したアーカイブスを活用できる環境、研究者の専門に裏付けられた活用法をふまえた情報発信が求められる。これらをどのように活用していくかといったヴィジョン作成と推進には、国はもとより、地方自治体の識見と力量、地域の文化力が問われているといえよう。

註

- ¹⁾ 最初は雑誌『驢馬』、次は雑誌『種蒔く人』の復刻版を刊行し、さらに透谷や藤村の『文学界』を復刻したがここで復刻事業から手を引き、文学館に引き継いだ。
- ²⁾ 昭和 33(1958)年秋頃、まず「プロレタリア文学図書館」の構想で延べ面積 60 坪で常駐 1 名の小さな図書館の規模を想定した。アジア・アフリカ図書館（当初は郭沫若文庫）設立がきっかけで、参考にしたという。西田勝「近日本近代文学館誕生の「神話」と真実」『日本近代文学館』第 190 号（日本近代文学館、2002）
- ³⁾ 初代理事長となった高見順は昭和 40(1965)年に死去する。彼の遺した原稿・草稿・本人宛書簡・蔵書が寄贈された。翌年川端康成を実行委員長に「作家高見順展」が開催され、近代文学館の周知に寄与した。
- ⁴⁾ 西田勝「近日本近代文学館誕生の「神話」と真実」（同上）。
- ⁵⁾ 北海道の風土・文化誌『ウェブ・マガジン カムイ・ミンタナ』1987 年 11 月号／第 23 号〔特集〕札幌より（2013 年 10 月 12 日閲覧）（<http://kamuimintara.net/detail.php?rskey=23198711t01>）
- ⁶⁾ 北海道立文学館 HP より（2012 年 5 月 20 日閲覧）（<http://www.h-bungaku.or.jp>）
- ⁷⁾ 設立の趣意（同上日閲覧）（同上の <http://www.h-bungaku.or.jp/foundation/origin.html>）
- ⁸⁾ 北海道教育委員会が北海道立文学館の管理運営を財団法人北海道文学館に委託しての運営である。平成 18(2006)年からは、指定管理者制度となり委託契約管理となっている。平成 23(2011)年に財団法人北海道文学館は、公益財団法人北海道文学館となった。
- ⁹⁾ 『風土一人間学的考察-』（岩波書店、1935）17 頁。
- ¹⁰⁾ 風土と文学の繋がりには地方だけではない。幸田露伴・夏目漱石・樋口一葉・永井荷風・芥川龍之介ら、江戸

- 東京にも見ることが出来る。
- 11) 秋田に残った同人近江谷友治、畠山松治郎の活動の様子は、『種蒔く人』の「地方欄」で報告されている。
 - 12) 昭和 20(1945)年 8 月 14 日深夜から翌 15 日の未明まで、太平洋戦争最後の空襲のひとつ。
 - 13) 自らのシベリア抑留体験を帰国後に『極光のかげに』（目黒書店、1950）を著わした高杉一郎は、彼の義妹の夫であった宮本顕治から共産党に都合の悪い事を書いたことへ激しい叱責を浴びたという。
 - 14) 小田切秀雄は、「退廃の根源について—日本近代文学の場合」『思想』351 号（岩波書店、1953）で、共産党よりのプロレタリア文学史観批判とそれに結びついた文学運動論を批判した。
 - 15) 小田切進は『昭和文学の成立』（勁草書房、1965）中で「昭和文学の成立をたどってゆこうとすればどうしてもここからはじめるほかない」と述べている。
 - 16) 西田勝「近日本近代文学館誕生の「神話」と真実」（同上）
 - 17) これら一連の動きについては、金子洋文書簡から汲み取ることができる。秋田市立土崎図書館「書簡」『金子洋文資料目録』（秋田市立土崎図書館、2007）93 頁。
 - 18) 土崎図書館は平成 3(1991)年に現在地に移転改築した。その際、記念碑も一緒に移転し、館内に「種蒔く人」資料室が設置され、現在に至っている。
 - 19) 平成 3(1991)年 7 月に 70 周年記念講演会と記念展、平成 13(2001)年 10 月に 80 周年記念集会、平成 23(2011)年 10 月に創刊 90 周年の集いが開催された。
 - 20) その内容から多くは金子洋文によるものと目されているが、現在のところ立証はされていない。
 - 21) 祖父江昭二は復刻版『文芸戦線』において「この復刻には金子洋文の持つ資料にもよった」と記している。『文芸戦線』・『文戦』解説『復刻版『文芸戦線』（後期）別巻』（戦記復刻版刊行会、1983）3-16 頁。
 - 22) 金子功子「竹藪の家」『「種蒔く人」の精神』（「種蒔く人」顕彰会、2005）46-53 頁。
 - 23) 宛先は当時金子が寄寓していた我孫子の武者小路実篤の家である。
 - 24) 『極光』（1916-1919）は秋田県の同人短歌誌。金子雄二（号：タニ）が中心となり極光詩社が編集、刊行した。富田碎花の「放浪哀歌」を始め、武者小路実篤、金子洋文らの文がある。
 - 25) 加賀谷三次郎(1884-1947)のこと、彼はその後土崎に戻り、土崎港名誉助役を 1924 年から 1929 年まで、町会議員を 1921 年から 1937 年までの連続 5 期務めている。『秋田民衆新報』（1929-1940）も経営した。
 - 26) 根本彰「地域社会と公共図書館—地方分権の論理を超えて—」（2013 年 12 月 4 日閲覧）
(panflute.p.u-tokyo.ac.jp/~anemoto/text/tama/tama.html)
 - 27) 岩崎久美子「フランスにおける上級司書の養成」（筑波大学学術博士論文）2013 年。フランスの上級司書は、国家エリート養成を行う文系グランゼコール、国立古文書学校の出身者が多かった。現在は、彼等と国と地方の上級司書(日本の国家公務員総合職に相当)らが、国立情報学図書館高等学院で 18 カ月の研修を経て、図書館上級司書免許を得る。カリキュラムには、「コレクション形成と運営」、「図書館史」、「書物の歴史」が多くある。ほかに、優れた図書館建築があるフランスならではの「建築と改修」が含まれている。
 - 28) 宮沢賢治記念館で、古くから宮沢家を知る高齢のボランティアガイドより（2012 年 10 月 25 日取材）

参考文献

- 『秋田県立秋田図書館所蔵種蒔く人文庫目録 付・今野文庫目録』（秋田県立秋田図書館、1992）
- 『秋田市立土崎図書館所蔵「金子洋文資料目録」』（秋田市立土崎図書館、2007）
- 岩崎久美子「フランスにおける上級司書の養成」（筑波大学学術博士論文、2013）
- 岡野裕行「日本近代文学研究における文学館の役割—「全国文学館協議会」加盟文学館の発行物を中心に」（筑波大学学術博士論文、2006）（2013 年 10 月 2 日閲覧）
(<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/B26/B2691837/1.pdf>)
- 小田切秀雄編『「種蒔く人」復刻版』（日本近代文学研究所、1976）
- 小田切秀雄『私の見た昭和の思想と文学の五十年』（上）（下）（集英社、1988）
- 山岸郁子「〈資源〉としての文学」『産業経営プロジェクト報告書一般研究』35-2 号（日本大学経済学部、2012）（2013 年 10 月 12 日閲覧）
(<http://www.eco.nihon-u.ac.jp/center/industry/publication/report/pdf/35/35-2-2.pdf>)